
シテキなもの

滑瓢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

シテキなもの

【コード】

N0584Y

【作者名】

滑瓢

【あらすじ】

タイトル通りである。とにかく書いてみようと思った。書いてみたかった。マジで私的な、マイワールド。

コジンテキなもの（マエガキ）

ほとほとこの世界で生きていくのに疲れてしまった私は、これから生きていく世界を自分で作り出すことにした。

・・・なんて書き出しは、少し大げさなんじゃないかと自分で思う。こんなこと出来たら神様だ。この世界で生きていくのに疲れなにかしないだろうに。要するにかっこ悪い言い方をしてしまえば現実世界への逃避なんていう甘っちょろい方法で私はこれから生きていくことにしたのである。それにしたって『世界を自分で作り出す』

なんてよくも言えたものだ。なかなかに壮大かつ非人間的行為であるが、しかし創作だとかクリエイトという単語に置き換えてしまえばあら不思議、あつという間に人間的なありふれた行為となる。そう、もつと簡単に言ってしまうえば私は創作をして、現実世界への逃避を試みようとしているのである。創作といっても絵画や小説、漫画などいろいろあるのだがしかし私は今のところ絵の才能がまるつきしないということだけははっきりしているのだ。絵画や漫画などというジャンルなどに手を出したりはしない。そして残った選択といえば『小説』ぐらいのものになる。ぐらいのものなどと抜かしてしまうと世のクリエイトたちに睨まれそうなものだが、しかしこんな私的な小説、だれも注目してはいないしましてや出版もされていないのに世のクリエイトたちに私の小説が目につくなどもっての他、有り得ないわけである。

はじめは脚本にしようか小説にしようか迷ったものだが、しかし未だにその判断は付かずじまいだ。先ほど『小説』などという単語を二度三度チラリしてみせたのに関わらず『脚本』などという通常の人たちには少々読みにくいジャンルの読み物に手をつけようとしているのは、私が現役の演劇部員ということに起因している。演劇の世界に手を踏み込んでしまった私は単純ながらその世界にすっかりとあてられてしまい果ては劇作家などという大それた、成功しなけ

ればなかなか安定しない生活を送ることになるであろう邪道な道に進もうかという血迷った未来予想図を思い浮かべている始末なのだ。昔から生粋の普通人でありふれた人間であるのにかかわらず変人になるうとしていた。普通の人生を歩むとかいうのがどうしても嫌だった。フリーターでも何でもいい、好きなことを好きなように生きて生きたい。そう人一倍強く願う奴が私であった。就職という言葉が嫌いだ。大学に入るにしてもそこは就職がどうのこうのあそこは就職が有利やら不利やら、そんなごちゃごちゃした考えで私は大学を選びたくはなかった。言っただけでなかった。ちなみに私は高校2年生である。胸張って言おうか、『女子高校生』である。ふふふ、このまぶしいほどに輝かしく見えそうな身分なのだから、胸張ってもいいのではないか?と思いつながら明かした身分である。実際は彼氏もいなければ可愛くもない、なにやらのんぼりしたモサイ高校生だ。若さの輝きひとかけらも見えないグレイな感じである。

この作品はそんな女子高校生が書いた、現実やら妄想やらが入り乱れた私的な日記と書いていただければいいだろう。こんな偉そうな文体も、いつまで続くやらさっぱり見当がつかない。つまるのところ何でもありの小説であったり脚本であったりするものである、という風になるのだろうかこれは。何ぶん気まぐれな私だから、今はこんなにもやる気になってパソコンのキーボードカチカチしたりしているけれどもいつの間にもやら飽きてしまっただけで投稿も無くなってしまうたりするかもしれないかと思えば何ヶ月かした後にある日急にまた投稿があったりするのかもしれない。先ほど文体のことについても触れたが、自分をあまり持っていないというか自分なりの表現の仕方が今だに掴めていない私はその都度読んでいた小説やら脚本やらに文体を右往左往されて、文体が西尾維新になったり人間人間になったり伊坂幸太郎になったり森見登美彦になったり万城目学になったりその他色々な作者になってしまうことが常なのだ。現在の場合、読んでいるのは松尾スズキ、作。『宗教が行く 下』の文庫本。私の今の文体は松尾スズキだ。こんな風に前書きとして

自分を語ってしまうのもその影響だ。なんと影響されやすい。松尾スズキさん、知っているだろうか。どうでもいい補足だが、私は大人計画が好きで、今のところ私の中で見に行きたい劇団第一位の座だ。知っているだろうか、大人計画。『フクスケ』という作品で私は初めて大人計画に出会った。かなりの衝撃である。今まで高校演劇という生ぬるい世界しか知らなかった私には、もうすんげえ衝撃である。学校でしか音楽に触れていなかった人間がロックを初めて聞いたときのような衝撃である。もともと高校演劇には個人的に温い温いNHKみてえだと思っていた分、こんな衝撃を人に与えるような舞台を作ってみたいと心底思った。高校演劇の人、ごめんなさい。少なくとも私の知っている中での『高校演劇』である。日本全国にはもっとすごい高校演劇があるのだろうか。まあ知らんけど。

そんなこんなである。どんなこんな？

まあ、今まで私が書いてきた全てのことに関してである。

興味があれば読んでみてください、と。

ただし批判はやめて欲しい。

向上意欲は多大にあるのだが、しかしいかんせん人に真面目に私を否定されてしまったら、私の自信はあつという間にすばみ消えてしまつて復興にかなりの時間を有するだろう。

自分の作り出した世界でさえ自分を否定されてしまつて、私はまた新たな現実逃避への道を探さなければいけない破目になつてしまふのだ。

以上、前書き終了。

書きたいことは、全て書いた。・・・今のところはだけど。

これからの話は、未だ決まっていない。

ラブテキなもの 1 (前書き)

ちょっとラブテク下さい、あと私があったらいい妄想も交えたお話。

ラブテキなもの 1

それは昨日のことだった。たまたまツタヤに来ていた私が見たのは、同じクラスの佐々倉くんの姿だ。ジャージ姿にTシャツだけのラフな格好で、海外ドラマのコーナーをふらふらと歩きながらぼんやりとDVDの棚を見上げていた。佐々倉くんとは、あまり話さない。というか男子となんて滅多に話したこともない。何故かって言うとそりゃあこっちが聞きたいわボケってな位なわけだが、そもそも超絶人見知りな私が話したことも無い男子に自ら話しかけられるわけもなく、話しかけてもらいたいのには山々だが、しかしどうにも上手くいかず声をかけられたといってもそれはたとえば私が何かを落としてしまつて気付かないときだったりする。要するに雑談というものを男子としたことがない。そんなものがなければ、親しくなれるわけがなかった。そうして二年生の二学期現在に至る。どうやら私は男子から見て遠巻きにでも少し普通の女の子とは違う変人さんということに迂闊に近寄ろうともされないのだ。どうしてそうなる。何か私にしたというのか。確かに他の女子たちとは違い愛想も悪く人見知りという特性故に見知らぬ人とは無表情であまり笑えない。休み時間では本が一番のお友達。一人でひたすら読書に没頭して、無表情で何を考えているか分からない・・・それがおそろしく私の印象。どうよこれ、話しかけてよ！私だって寂しいわくそが！

佐々倉くんとは一年生でも一緒のクラスだったのだけれども、考えてみれば交わした言葉など作文用紙の一行分にも満たない程度だ。隠れようと思つた。さっさと姿の見えないところまで行つて、アニメコーナーへ・・・しかし私は見てしまった。そそくさとその場を通ろうとする私は、もちろん佐々倉君に全身全霊注意を傾けていたもんだから、佐々倉君の動向ひとつひとつに神経を光らせている。こっちくんこっちくん振り向くでないわ！と祈つていると佐々倉くんは背中を向けてスタスタと歩き出した。またそれが実にナチ

ユラルな動きであったので私もその様子を安心して見送っていたのであるが、しかしあるうことか佐々倉くんがナチュラルな動きでスタスタ向かった先は十八禁コーナーであったのだ。まあ突き当たりにあるのでそこからスイーツと横へ曲がる可能性だって大いにある。私はその可能性を信じて疑わず、そしてもう一つの可能性である十八禁コーナーへは全くの予想がなされていなかった。行きなれたところでそこにある十八禁の青い暖簾などあつてないような壁である。そしてその壁に、いとも容易く佐々倉くんは入っていった。

わーお。

ハリポッターか。あれか・・・9と3/4番線かな？あーそつか、日本でこんなところにあつたのかー。んー・・・知らなかった！初耳だね！それでホグワーツへと繋がる列車がポツポツと待機して・・・そうもねえ！ないわ！想像したけどさすがにこの想像はないわ！どんなファンタジーですか。繋がる世界はめくるめくエロの世界！

というわけで、昨日はツタヤの十八禁コーナーへと入っていく佐々倉くんを目撃した。

ラブテキなもの 1 (後書き)

これいつまで続くのかな。

ラブテキなもの 2 (前書き)

続き。

ラブテキなもの 2

佐々倉くんは、昨日の私に全く気付いていないようであった。これ幸いと思うべきか、気付いていたとしたら確実に気まずい。まず間違いない声をかけられることはないくせして、意識だけはめっちゃくちやされるという落ちになってしまふところだった。危ないところだ。

佐々倉くんは基本的にいい人だけれども、しかしぼんやりとクラスメイトの一員としてしか見ていかなかった私なりの佐々倉くん像などあてなにならない。実際どんな人なのか分かったもんじゃないのだ。気付いていて私のことを男友達と話しているなんて考えるだけで嫌過ぎる・・・という考えを巡らせたおかげで一日中佐々倉くんをチラチラ見つつの学校生活を終えた私を得た結論である。

佐々倉くんはいつも通りであり、また妙に私のことを気にしていた感はあるがそれはただ単に私がチラチラ見すぎだったせいに違いない。あちらを見ていたタイミングで明らかに私を気にしていた。何かもう私が阿呆過ぎる。どれだけ転倒本末だ。

佐々倉くんは、背が170センチメートルくらい、顔そこそこよし、男子テニス部所属、現在彼女なしの男子である。男友達は大体が男子テニス部。現在彼女なしとの情報は、私が何となく見ていて目星をつけただけの話なので確証はできない。しかし、いなさそう。童貞たるたぶん！

・・・まあ何となく私の希望である。佐々倉くんは、前から何となく『いいな』と思っていた男子で・・・いや、まあ何となく話であり、というか顔そこそこよしと言っておきながらではあるけれども彼女がいなさそうからしてあまりモテてはいないらしいし、いいのかどうかさえわからない。ただ格好いいというよりは、私が見るからに特出して嫌な部分、たとえば鼻がでかすぎるだのその黒子が嫌だのにきび出来過ぎだの顔荒れ過ぎだのとそういった私が三

次元の男子を見る上、接する上で気になってしまつどうしようもない細かい箇所なんかがなく、私的にいつてしまえばバランスも取れていて飽きない顔立ち・・・というか。うー、む。何というか、そこまで言つておきながら今更なんだけれど、私気持ち悪いな・・・。何を考えているのだろう。佐々倉くんはいちクラスメイトであり、その佐々倉くんについてここで話しているはずではなかったのか。なんだ、彼女がいないとかいるとか。関係ないだろうがそんなことは。考えてみれば単にツタヤで佐々倉くんを見かけてしまったというだけであつて、何をそこまで彼を意識しているんだ私は。きつも！クソ、なんだこの感じ・・・。超きもいわ！何かヒク！

頭の中で思考をぐるぐるとさせていながら、放課後の帰り道、何故か私はツタヤへと向かつて自転車を走らせていた。昨日のようなイベントを内心期待してるとかマジきもいが、しかし『そうさ私はきもいさ、フェツフェツツッー！！』と今や開き直りの精神である。心臓がバクバクだ。普通学校帰りになど肩にかける学生力バングが重いわ持つ鬱陶しいわでどこにも寄らずにさっさと家路につくというのが私のセオリーであるが、しかし家に帰ったら帰つたで再び着替えて自転車に乗つてお出かけとかおそらく私の面倒臭がりぶりが発揮されて実現など不可能だろうし、かと言つて週末までこんなドキドキを放つてなどおけない。佐々倉くんが再びツタヤに二日連続で現れるという可能性はおそらく圧倒的に低いため、期待すんな期待すんなと心の中でひたすら予防線を張る。期待すんな期待すんな、ドキドキすんな！何だもつ！私こんな自制心低かつたか！？ドキドキすんなつてもう、鼓動激しくななつてクソ！！

ああそうさ、私は単純過ぎる。私は恋愛偏差値が低過ぎる。高校二年生で、男の経験はなし。手を繋いでデートをしてもらったことも、抱きしめてもらったことも、キスしてもらったことも、もちろんそれ以上の経験だつてしてもらったことはない。もうダメだ、私は恥ずかしさで死にそうだ。十八禁のコーナーへと入っていく佐々倉くんを見て彼の特別な秘密でも握つたつもりか、大げさな。そん

な秘密知ってどうするつもりだ、佐々倉くと親しくなれるか？どうやってなれるんだよ、どうやってなるんだよ。どうせ自分じゃ近付けやしない。いつでも私は受身にしかなれなくて、だから彼氏だつてできなかった。男子と親しくなることすらできなかった。っは、だつて私、軽く話しかけられただけでその人の好感度がっちゃうんだぜ、その人がどれだけヤリチンなのかとかヤンキーなのかとか知ってても、それでも私に普通に接してくれたっていうのが嬉しくて、女子扱いされたと勘違いしちゃって、舞い上がっちゃうんだぜ。バカらしー。どんだけ幼いんだ私。どんだけ男に飢えてんだ。盛つてんじゃねえよ。

ツタヤの扉をくぐると、そこは本屋さんである。この店は二階構造となっており、一階は本屋さん、二階にDVDやらCDのレンタルが可能なツタヤがあるのだ。

本屋さんは後回りにするとして、自動扉を抜けてすぐの右側にある階段を上っていく。片方の肩だけにかけて青くて重い学生力バンのおかげで、私は重心が定まっていけない。フラフラとした足取りで、おそらく片方の肩を下がらせているだろう体勢のまま私は階段を上がる。

佐々倉くんの姿が、脳裏に浮かんだ。

割と好きな顔、細過ぎず、大き過ぎず、しかしガツチリしているところはガツチリしているその身体。笑う、笑っている。あの人はよく笑う。面白そうに、嬉しそうに、楽しそうに、笑う。

ああ・・・やばい。早く終わらねえかな、このドキドキ。どうせいつもの男子気にしすぎ惚れ過ぎ注意症候群だ。一旦接触してしまつと、もう駄目なんだからなあ・・・。あーあ、くそあ・・・。ほれほれ、痛い目見るぞ。どうせあつちは私のことなど毛ほども異性の対象として見ていないからな。期待すんなマジで。

「中村さん」

名前を、呼ばれた気がした。しかし、勘違いしてはいけない。中村なんて名字はざらにいるもんである。というか明らかに男の声だ

った。私にこんなところで声を、しかも名字で呼びかけるような男は存在していない。誰だそいつは。私の妄想の化身かこら。

こんな広い店内の中、さほど近くもない場所から私の名字が呼ばれたような気がしたって別に過剰反応してしまう自分ではないのだ。中村って多いから。同じクラスにも一人いるから。学年で数えても、確か三人ぐらいいる。友達少ない・・・というかまあほとんど皆無に等しい私からして名前を呼ばれたような気がして反応するとそれは私ではなかったパターンなどこれまで何度経験してきたか！もう慣れ過ぎて名字呼ばれても他人呼ばれてるみたいな感じだわ！何度かそれで呼びかけられたのに無視っちゃったことあったよ！！！失礼だわくそ、ああ・・・また自己嫌悪の渦に・・・。

「ちよつと待つて」

後ろからそう言って、階段を駆け上がる音がする。
え・・・ちよつと待つて・・・これはマジで私では・・・ギヤア
アアアアアアアアアア！！！！

警報警報！！胸の鼓動がバクバクである。漫画であるなら私真っ赤である。実際めっちゃ火照って熱いんだけどどうしようこれ。

ガクガクで振り向いた。

「中村さん」

佐々倉くん。私は機能停止となった。

容量オーバーである。

コレハ ワタシニ オエル イベント デハナイ。

ラブデキなもの 2 (後書き)

・・・文がもう支離滅裂すぎるような気がしてならないが、まあいいや。

ラブテキなもの 3 (前書き)

何だかラブテキとはどんどん離れつつある気がしますが、ご了承ください。

ラブテキなもの 3

一般的常識に基づいて、考える。

男の子が好きな女の子は、どんな風な子なのか・・・。

私がこれまで散々十年ちよつと悩んできた末に出てきた結論で言うとおまりにもベターというか何とか王道臭いが、しかしこれが結局一番良いのだということをお私には私なりに知っている。モテる女の子、やはりそれは今ドキという雰囲気をも出し出したいかにも『女子高校生』の看板を背負うかのような女子。いや、そりゃあもう女子高生と言ったらアレだ、花の女子高生つてやつでもういかにも華やかかって感じで・・・。時にお洒落に、時にスポーティーに。ほら、やっぱり身体的にも精神的にも今が一番元気な年つていうかね、同じ女子高生としてそういう子たちつて、超まぶしい。イケイケオーラはやはりモテ度に相乗してあるもんで、まあ大抵そういうまぶしい子らには彼氏がいたりする。リア充がアアアアアアアアアアアアアアアア！滅びる！！！！・・・なんてことになりかねんが、しかしそんなもんだだけの憧れであり、私のそういつた類の恨み言はイコールして単に羨ましいだけなのも私は自覚している。まあ私の知り合いというかよく喋る子なんて皆そんなもんなのでその雰囲気に乗してるのも少しはあるだろうが、どちらにしたつて痛々しい話だ。というか痛々しい子の話だ。そんな感じですよ、私！・・・もうね、人生一回きりつてのに何やってんのつて話ですよ、なるー、このヘタレが。お前が滅びるよ。

自虐思考なぞ日常茶飯事である。ぶつちやけ言つてしまえば自信というものがびっくりするぐらいない私からして普段から自分を底辺の位置に設定することで安心しているのだ。ぬるま湯つてやつ・・・？フフン、ちよつと『ぬるま湯』つていう表現使いたかつただけだったりするから意味分からんとか言うなよ。私傷つくから！ペッラペラの自信なんておぼつかなさ過ぎてもう普段から安定してない

「まあ・・・見に来ただけ」

頭がショートしそうである。グルグルと頭の中で思考だけが回り続け、その場の会話には到底着いていけない。アドリブ力が悪すぎるのだ。いつもこうやって、会話続かないから私にはなかなか友達というものが出来ない。

「俺も。ていうかさ、放課後結構な確率で寄ってんねん。昨日の日曜も来たしな」

そういえばテニス部は月曜日が休みだった気がする。・・・だから帰宅部の私でも会えたのか。今さら気付いたが、まあ結果オーライ。土日に割とここに通っている私だけれど、しかし今の今まで会わなかったのは時間帯の違いらしい。私は主に朝からお昼ごろまでに行くことが多いが、昨日は奇遇にもたまたま夕方ごろ寄らなければならなくなったため（読んでいたライトノベル一巻に思いの他ハマリ、続きがどうしても読みたい衝動に駆られる）四時ごろにここに立ち寄ったのだ。そして、佐々倉くんを発見した。

「佐々倉くん・・・」

・・・ヤバイ。言いたい。どうしよう・・・超言いたいぞ・・・。

「あ・・・あー・・・あの、あれ・・・昨日・・・」

・・・良いのだろうか。

大して親しくもない女子から、『昨日AV借りてたやんな』の指摘はあまりに衝撃ではなからうか。

・・・しかし・・・んー・・・超言いたいぞ！！！！！！！！

いや、だってだってもしかしたらただけどその話で打ち解けられるかもしれないし！私心開けるかもだし！佐々倉くん、何か今めっちゃとっつきやすいし！というかぶっちゃけ興味あるんだよおおオオオオオオオ！！！！男子の工口事情！！！！！！

「ん、何？」

・・・んぐぐぐぐ、やばいやばい、人の好い笑顔浮かべちゃってまあ・・・ぬぬぬんぐぐぐぐぐぐぐががががわっつわっつもうっバクバカウバカウバクバクバクバク胸が、胸が！ときときときめ

ラブテキなもの 3 (後書き)

最後、え？人外語？いや・・・うん、違うからね。あの・・・心象内の困惑ですよ。すいません、たまにあんな奇声を週一回は心の中で叫んでいる気がする私、おかしいんですかね・・・？ああ、うざいなすいません。まああるよね、うん。・・・たぶん。そして、まさかの関西弁でした。だってこれ私の妄想だから・・・。関西地方なんです。ちなみに猫背過ぎて病院行くハメになったのは、リアルにマジな話。ああ、そうか・・・。猫背猫背とは思っていたけれど、私はあれか・・・背骨がどうかしてたんだな、私の姿勢が悪いからどうこうではないんだな！！と夏休み汗だくで病院行って、レントゲンとられて、「ただの猫背です」と言われたときの衝撃・・・。

ラブテキなもの 4 (前書き)

終わりがどこが見えなくなっておりますが・・・。

ラブテキなもの 4

・・・一つだけ分かったことがある。

佐々倉くんは、いい人だ。

女子がエロ話など下品だなんてそんな引いたような反応をするでもなく、ただただほんの1、2秒びっくりしたように目を見開いて次の瞬間にはその顔が少し恥ずかしそうな笑みへと変わる。・・・純情か！エロDVDを借りたのはそっちなのに、私が佐々倉くんにエロDVDを見せているような気分になっちゃってるのはどうしたことか！

その顔を見て、私の心の中の扉が佐々倉くんに向けて少し開かれた気がした。まあ基本はちよい女なのである。・・・ただ、皆こっちに近づこうとしないから、分からんだけでね？いや、ホント、別に無愛想つてのは怒ってるわけじゃないのよ？・・・いや、まあ自分からそれを教えようとしなくて分かってるのは虫の良過ぎる話つてのは分かっている。分かってはけれども、それを簡単に教えられるんなら苦労はしてない。青春を謳歌し、友達とカラオケ行き、彼氏の一人なんぞいるそんな女の子に・・・は私になったらキモいけれどまあそんな感じになれてたかもしれない可能性だって、あったということ。閑話休題（使ってみたかっただけ。かの西尾先生の影響なのは言うまでもない）。しかし今や大半の高校生恐怖の私にとって、その笑顔は私の警戒度を少し解くばりの破壊力があつた。うーん・・・嬉し過ぎる！まあ？何というか？余裕が私にも生まれたと言いましようか、にやはははは！！！！こんなちよつとしたことで、調子に乗る私ってどないなんですか！！！！

自然、口は少し軽くなる。

「何借りたん？」

もう、このエロエロ大魔神がつ！しかし、私は女である。『花の女子高生』である。だから・・・エロエロ大魔『女』？・・・え、

それってえろっ・・・!!何だよ、もう。興奮しちゃってんじやないよ。妙に楽しい気分だよ。どうしよう、私変な感じだよ・・・。
「・・・あー・・・借りてない」

借りてなかった。まさかのそっちパターンだった。まあそう言われてみればTSUTAYAでエロDVD借りるとはなかなか勇者度が高い試みである。今時エロ動画なんぞPSPでもパソコンのどっかのサイトとかからでも引っ張ってこれる時代だ。無料サイトなんて、さらにどこにでもあるからね。まあ何故私が知っているかとそれは・・・ゴニョゴニョ（以下略）。まあそういうことだ。わざわざTSUTAYAで金払ってまでエロDVD借りんよねってことか。そりゃそうだ、何たって学生さんですもの。お金なんてあっても足りないお年頃ですよ。

「借りたこと、ないもん。あっこはいつも見るだけで・・・」
「いつも！いつもって何すか!？」

「あー・・・ていうかさ、中村さんそういうの話すんねんな。知らなかった」

「ん、何が？」

「こついうときの私は、反射的にすつとぼける。こついうとき？どついうときよ??いや、知らんけどさ・・・」

「何かそういう話する人には見えなかった。ほら、いつも本とか読んでるやん」

皆さん知らないようだけれど、というかこれは本を普段ほとんど読まないという人たちに見られる勘違いなのだが、読書好き^{カタ}「固い」というイメージが何故だか共通的にあるようだ。今時の可愛い女の子がちーっとエロいようなポーズしてたりあるいはそれを示唆させるようなバナナ啜えたり白いドロドロのもの被っていたり頬赤らめて脱いでたり脱げたりポロリだとかかそんなもん、ふつつーの文学の世界では『・・・フ、お子様ねツツ!!』みたいなノリである。絵もない分、あっちの世界の方がよっぽど生々しい。純文学でエロい場面出てくるってなったら、そりゃもう80%は濡れ場です

わな。しかもラノベのような高校大学生あたりの若くて甘酸っぱい感じの年代ではなく、そこに出てくる登場人物ってなったらまあそこそこ経験済みの熟れた人たちですよ。濡れ場じゃなくても、まあネットリ系ってことで・・・ベロちゅーやらフ　ラ　オとかがね、こつ、卓越された文章で克明に・・・はははははは！規制するわ！ごめんなさい！！小学生の頃に知ってしまった世界ですよ！もうね、これは私の経験上のアドバイスだけれど、重松清さんと東野圭吾さんの著書を読む際には、くれぐれもお気をつけてください・・・。

「いやー知ってるよ、うん。知ってるわー。むしろそれしか知らないよ」

何だか変なテンションのまま変なことを口走ってしまったが、もう遅い。まあ普段からあまり人と話さないせいで、私の声量は他人と会話が出来る程度というものをいまいち分かっていないから、たぶん大丈夫。すでにそれが大丈夫じゃない気がするが、しかし今の私の声は明らかに私が認知出来るほど小さいものだった。独り言ともつかぬ感じの台詞が功を奏したか・・・。言わなくともよいと自分で分かっていたからこそ、恥ずかしさが混じったか！うーん、ナス・・・。「いやいやいやww」・・・ん？え？何か、佐々倉くんが笑ってるんだが。心なし若干ヒいてる風にも見えるんだが。

「オモロいな、中村さん」

そうやってクツクツと笑っているが、心中どうなってるらっしゃるのだろう。

・・・面白い？

・・・それって、どっちの意味だ???

ラブテキなもの 4 (後書き)

マジで鬱になった小説、重松清さんの『疾走』。これはマジで……うん。

ラブテキなもの 5

人が「さんて、オモロいね」とか言うとき。それは大体二通りに分かれていたりする。

すげー極端に言っちゃえば、まああれですね。

「さんて、オモロいね（意外）（この人とは、上手くやってけそう）」

「さんて、オモロいね（ヤバ）（ププww）」
お分かりだろうか。

前者は好印象を含め親しげな空気が漂っているが、それに比べて後者はどうだろう。明らかに見下した空気含め『コイツ私より下だな』とか心の中で思っていないにせよ脳内では勝手に相手判断がなされ判決が下された決定的発言である。

昔から何かと少しズレたという印象を受ける私からしたらこのようなことを言われるのは日常茶飯事であったのがしかし、それはほとんど多くが前者からよる発言であった。私は自分で言うのも何だけれどかなりキリツとした顔立ちである。覚えているが、何回かハーフかどうか聞かれたことだってある。確かに日本人離れしたくつきりした顔立ちなのである。眉はキリリとそれなりにぶっといわ目はでっかいわ鼻高いわいちいち顔の部分部分が自己主張激しくて・
・鏡で見るたびその顔のインパクトつたらない。美容院なんてさ、髪始めの方まとめてくれちゃったりするもんだから私自分の顔見れないもんね。シャンプーとかしてもらった後が、一番ひどい。軽くオールバック状態ですからね、もう隠しきれようないというか・
・眉毛が隠れてる分人並の日本人の顔保ってるようなもんなのに、キリリ眉毛出しちゃあ終わりですよ。自分の顔見てビビるって、結構悲しいもんあるからねくそがアアアアアア。

まあそんなわけもあってか私は蓋開けてみりゃあ後者より言われる面白いね発言言われるような連中と同類な癖して、無表情で本読

んでるだけで『中村さんは真面目』印象を周囲に与えてきた人間だったのである。話す回数を重ねることにそんなメツキすぐにはがれるのだが、まあそのメツキの一枚目がはがれはじめたところで言われてきたのが、この『中村さんて、オモロいな』（後者）というわけだ。ちなみにこの発言は後に『いやいや中村おかしいやるww』と変化を遂げる。変人呼ばわりして欲しい変人にとつちや、嬉しい限りのご褒美発言だ。

そんなわけで、今回頂いたそのお言葉、どちらに分類されるものかと私は今現在進行中で検討しているというわけである。

何故かその右手には握られたマイ携帯。

服が散乱しているのを無理やりまとめて作ったふくらみの上に置かれた枕に頭を預け上半身を半ば起き上がらせた状態で、私はぼんやりと真つ白い天井を見つめていた。

あの後何故か、佐々倉くんに「メアド交換せえへん？」と誘われ、あれよあれよといつの間にか佐々倉くんのメアドをゲットしてしまった自分がいる。

・・・フラグ？

いやいやいや、どうなんだろうか。ここで舞い上がってはいけません。聞けば今時の男子女子、気軽にブログなどで知り合い私の預かり知らぬところで繋がっていて、メアド交換済ましいのメールなども頻繁にしているとのこと。学校で見えていなくとも、メールなどであの人たちは新たに独自のネットワークを作り出したりしているというのだから、油断も隙もない・・・くそ、リア充めが！！私らみたいなの放つてズンズン前進みやがって！！という話である。

・・・佐々倉くんは、こんなこと日常茶飯事なのだろうか。

以前私は、廊下で唐突に『なあ、メアド教えて？』とサッカー部男子に迫った女子という衝撃的なものを目撃したことがあるのだが、・・・さすがに佐々倉くんにそんな経験はないだろうとは思う。あの人はいつだって同じテニス部の男友達とつるんでいたし、女子と喋っていたとしてもその子たちは決してイケイケ女子というわけでは

く絡みやすくてとっつきやすい運動部所属という女の子たちに限られていた。モテモテだなんて噂ももちろん聞かないし、女関係で男子らにからかわれていた場面も一度だつて見たことはない・・・え、じゃあ何でよ。いやいやいや、分かんないからこんな悶々してんだけどね。分かつとるわコラ！！くそが、何だ私は。じゃああれだ、聞けば良かった？『え、何で？』ってか。『いや、別に聞こうって思っただけやねんけど・・・中村さんがええ（遠慮の意）って言うならいいよ・・・？』とか、ちよつと気まづくなつたらどうしてくれる！他人に気遣われるとかホント苦手なんだよ！！強引に来てくれって感じなんだよこつちは！！今まで結構いい感じに喋れてたのに急に流れ出すよそよそしい空気なんてこちとら厭つてほど経験して大っ嫌いなんじゃあアアアアアアアア！！「っなあああアアアアアア！！！！」

意味分からん奇声を上げて、悶える。前髪をグシャグシャに、そして更には側頭部にまで手は伸びグシャグシャに掻き回す。こういう一人で興奮したときの形容しがたい高揚感のようなものが一気に襲い掛かり、そうして私は一時停止する。この・・・一気にせり上がった高揚感と、ゆだつた後の静寂がたまらなく恍惚感だ。なんだろ・・・イツちゃつた後みたいな？あ、ゴメンなさいね・・・。

しばらく私はグシャグシャの髪のまま死体のようにつつ伏せになつてそのままジツと動かなかつた。

呼吸だけがハアハアと聞こえてきた。

ラブテキなもの 5 (後書き)

最近、イケイケサッカー部で彼女ありの脱童貞(ほぼ確定)男子にメルアドが書かれた紙きれをもらい、「メールして」と言われました。何が何やらはてなでした。とりあえずその夜メールしてみると、何と送れない。間違いがないか何度も紙切れと送信先を確かめたのですが、まあ送れない。仕方なしにほぼクラス全員のメルアド持てんじゃねえかという謎の人力を持つ男子にメールして、かくかくしかじかというわけで申し訳ないがそのその男子のメルアド教えてくださいなと頼むと、何とそのサッカー男子に連絡したらしく、、、『できなかつたらよいです とつたえてください やってさ(・0・)』

・・・と、返ってきた。

何だったんだろうかアレは。

今でも激しく謎である。

私の心臓バクバクを返せ。

ラブテキなもの 6

人見知りのヤツほどメールではキャラ変わるとか言うが、それは間違っていると私は思う。むしろ逆なのだ。メールのキャラこそ、その人が本当に持っている性格そのものであつて、普段しゃべつていてメールとキャラが違うなどという事態に陥るのはその人が単に人見知り故の口下手なだけの結果であると言つていい。本来の自分が緊張より出せないもどかしさというものを、私はよく知っている。特にイケイケ上位者への対応など、何度その後後悔する破目になつてしまつたか分からないほどの失敗を経験している私である。むしろ後悔しなかつた対応なんてないね！気持ち悪い不具合な愛想笑いしたか、それとも愛想笑いさえ出来ず表情が固まつてしまつたかのどちらかですよ、どうせ。・・・本当、この十七年間私は一体何を学んできたというのか。学校という恐ろしい社会の縮図みてえなコミュニケーションの中で生きていて十七年間のザマがこれですよ、何かビックリだよ。皆すげえねつてなるわ。

ここ数日。佐々倉くんを特別意識してしまつて、私はもうどうしようもない感じである。

何がどうしようもないかつていうと、とりあえず見てしまつ。談笑しているのを、聞き耳を立ててしまふ。初めてツタヤで佐々倉くんを目撃してから、翌日バレンじゃないかつてビビりまくつて意識していた状態がもう連日続いているような感じなのである。どうしよう。これは本格的にあれだ、お年頃の青春病というのだろうか、うん。そういうのが私を襲つてきている。

メールのやりとりはあれからほぼ毎日。何が楽しいのか、佐々倉くんはメールをしてきてくれる。もうそれがあれなのだ、私を勘違いさせていい気にさせている。もちろん、私からメールをし始めるということはない。大体夜の十時ごろを回つてくると佐々倉くんのメールが来る。そこから・・・まあコミュニケーションしているわ

けですが。もうさ、私は分からんよ。私は楽しいよ？いや、だつてさ、男子からのメールだぜ！同世代なんだぜ！しかも顔見知りで、クラスメイトで、何かもうそういうのがギョウギョウ詰まりに詰まった甘酸っぱい感じですよ、何か淡いピンク的な青春ですなあ。それがさ、私を襲ってきてるわけであ、向こう的にはどうか知らんが、私にとつてはそうなんですよ！もうさ、もうさ！！イケイケ女子ってこういう青春してるのかなあ少女漫画みたいだなあウヘヘへってなるのよ。この、『異性と毎日親しげにメール』ってのがもう私なりにドキドキなシチュエーションなんですよ。耐性がないのに程あるね。それは分かっているんだけどさ、しかし謎なのは佐々倉くんである。相変わらず学校では喋らないが、それでもメールは毎日してくれる。

・・・一体、どういうつもりなのか。

そりゃあ面白いと思つてただ単にメールしてるだけつてのもあると思う。本当、よく言われるんだよメールでね。『面白い』つて・・・。もうそのメール見ただけで喜びウヘウヘで私気持ち悪いんだが、しかしやはり気になるもんである。真意如何に。あるとき、ツタヤで交わした会話以来、佐々倉くんの私を見る目が少し変わったのだろうか。あの照れたような笑顔が思い出されて、やっぱり私は思い上がつてしまう。ちよつと期待とかしちやつたりして、その自分が気持ち悪くて悶々と自虐してしまふわけだが、でもやっぱり佐々倉くんとメールするたびそんなことばかり考えてしまふのだ。

一度、彼氏がいないかどうか聞かれたことがある。まあ文面だけ見るとすげー佐々倉くんが私を異性として見ているみたいだが、そんなことは全然なくまあ自然とそういう会話の流れになつたのだ。もちろんいないわなーというような感じで返事を打つた後、私は迷いに迷つた拳句聞き返したのだ。練りに練つて、ごくごく自然な感じに、何度も読み直しては私がいい気になつていないかチェックして、もうめちゃくちや迷つた末、返信のボタンを押した。

『そつちこそ、どうなんですかー。お盛んですか？』

返信がやけに遅い気がして、どうにもこうにもやるせない気分では部屋のベッドと机の間グルグルと行ったり来たりで、もうこれがアニメだったら顔が真っ赤なところですよねぇとか頭の中で無理やり他人事みたいに考えてみたりして。散々に悶々とした拳句に、返ってきたのはたったの一文だった。

『いやいや、寂しいですよw』

もうさ、分かんのです。

楽しくて、嬉しくて、こんなの慣れんです。

無駄にはりきって、有頂天で、これはどこまで続くなんてまるで予測がつかんです。

私はどうしていいかあたふたで、たぶんそれは相手にとっちゃすごく不思議なことなのでしょう。

もしかしたら、本当にただのメル友かもしれない。私はその中の一人に過ぎなくて。

そんなこと考えてしまうくせに、気持ちだけがフワフワと飛んでいって、抑えられなくて。

メールは楽しいです。どもることなく、下手な愛想笑いと下手な相槌で会話を打ち切ることなんてなく。このままどこまでもお話できるような気がするのです。

フワフワ飛んでいく気持ちどこへ行ってしまっのかさえ分からないまま見切り発車していて、目の前も行方もまるで見えません。

正直それが怖くて、でも楽しくて。止められなくて、抑えられなくて。

どうしよう。

本当に、どうしたらいいのか……。

シンピテキなもの 1

僕はまだ知らない。

世界はたくさん、いろいろなものが溢れているが、しかし僕の知っているものはそのほんのほんの一部である。それに関して話そうってわけではなく、しかし僕はこれから自分の知らないことについて果たして一体、どこまで話せるのだろうか。これは単なる希望であり、妄想であり、戯言で、知りたがりが見つたかぶりしてただ単にこれはそうあってほしいと述べているだけなのかもしれない。それでもいいやと思っている。それはそれでもいいと許される類のものであると僕は信じている。

これから話すのは、恋の話。

あつたかくて、楽しくなる、と僕が信じているもの。

十七歳なのだ。信じてもいいと思うのだ。

だから話そうと思う。

まだまだそれは僕にとってとはとても神秘的なもので、未知なる世界への道が開けているような、そんな気がするのだから。

シンピテキなもの 2

ドアを開けると、背中が見えた。縛られていない後ろの毛は何だか思ったよりも軽そうでサラサラとしていて、いつもよりその丸まった背中が子供らしくて新鮮だった。

「何」

僕が声をかけても背中にはピクリとも動かない。

「してんの」

ただずつとノンボリと動かなかった。首がほとんど見えなくて、うつむいているのが分かる。

本だと思った。伊呂波は本が大好きなのだ。

故に、よく読む。

「本！」

叫んだと思ったら、伊呂波はパタリと本を閉じたらしくパタンとした音が聞こえる。どうやらハードカバーのご様子。クルリと振り向くと、もう一度「本！」と吐き捨てて僕の顔をジッと見つめる。

「本だよ」

「分かってるよ」

3回目だ。

「それで、何してんの？」

「……………」

「本」

「……………」

「読んでるの？」

「……………ん……………」

目をキョロキョロさせて、意味もなく歩き出した。

「あ……………うん。あれだ、今はお昼休みだから」

「へーそうなんだ。お昼は食べたの？」

「じゃがりこ食った」

そう言ってからまた同じ場所に座りなおし、本に取り掛かるのか
また頭が見えなくなりだした。

「お昼、足りた？」

「あー・・・うん」

「ホントに？」

「いや・・・うん。まだ残ってるから大丈夫」

「あつそ」

肩にかけてた学生カバンの中のコンビニおにぎりとかヤキトリの存在を感じながら、僕は靴を玄関に脱ぎさつさと歩いて伊呂波の近くのソファアに腰掛けた。伊呂波の横顔が見える。真剣な目をした伊呂波はとてつもなく美人だ。存在は感じているんだろうけど本にはかなわないといった感じで、伊呂波は本に熱中していた。僕はカバンをソファアにおろすと、チャックを開けて今日のお昼ご飯を取り出す。

ビニール袋に包まれたその存在を目の端と耳で捕らえたらしい伊呂波がヒュンとこちらを向いた。凝視している。ヤキトリなんかはビニール袋からはみ出しているので丸見えだ。それを口をポカンと開けて、ジツと見つめていた。閉じようとした口はまただらしなく下がったりして、アウアウさせている。

「ヤキトリ、買ってきたよ」

そう言うと、その目は瞬時に僕の顔を見つめる。途端、ほわんと
なつて伊呂波の表情はだらしなく崩れた。

「いいの？」

「いらないうってんならいい」

「いや、いる」

グイと手を突き出したかと思うと、ヤキトリをビニール袋から奪い取る。そしてニコニコ笑いながら、幸せそうにヤキトリを見つめた。僕はそんな伊呂波をジツと見つめる。何しろこれは元々伊呂波への礼もあつたのオゴリなのだが、伊呂波はそんなこと全く気付いていないようだった。ただ突然舞い込んできた幸せにニへニへ笑

いながら、ヤキトリの串を大事そうにつまみあげてタレのついたヤキトリのカワに食らいつく。ヤキトリのカワは伊呂波のお気に入りのだ。あの柔らかいのがたまらないとか何とか。

僕はビニール袋からおにぎり一個を取り出し、包装を破いてパリパリとした海苔とともにおにぎりを口の中に入れてモシヤモシヤと咀嚼した。相変わらずの味で、美味しいもんだ。

「学校行ってきたのか」

口の中のヤキトリをもぐもぐさせながら、伊呂波が聞く。

「行ってきたよ」

「こんな早いのか」

「いや、今日は」

短縮授業だったんだ、と言いかけた口が動きをふいに動きを止める。

「・・・」

不自然に黙ってしまった。

言うべきか、言わざるべきか。

この件に関して伊呂波は全くと言っていいほど無関係で、しかしだからと言って話すのを止めようとかそんな合理的考えに基づいて決定する件でもないように思える。僕にとって話したいか話したくないかでそれは左右されるべき問題で、僕にはまだそれが分からず

にいた。

「？」

ヤキトリを串から口でくわえて外そうとしている伊呂波はそんな僕を不思議そうに見つめていた。

「・・・この人は。」

恋を、経験したことがあるのだろうか・・・？

「・・・」

何だ、コイツはとばかりに不思議そうな表情のまま伊呂波は僕か

ら視線を外す。見つめて返事を待っていても僕が何も喋らないからだろう。視線はじれったそうな目つきで閉じられたまま放置された本を見つめている。本当は読みたいのだろうが、しかしヤキトリを持ったまま読むなんてそんな本が汚れそうなこと、伊呂波に出来るわけがない。この人はこと本に関しては、異常なまでの神経質さを発揮させる。

「……まあ、いいや。」

「……短縮授業だったんだけどね」

「ふうん。よかったね」

「本当はもつと早く来れると思ったんだけど、ちょっと……」

「何かあったのか」

「……まあね」

ソファーに置いていたカバンを下に下ろすと、ソファーに寝転がる。片足をソファーの上に立たせて、もう片方はソファーの下のフワフワのカーペットへ。目の前には、白い天井が見える。

「まあ……びっくりしましたよ」

伊呂波の視線がこちらに向けられているのは、見ていなくとも分かる。

あの女の子は、今どうしてるだろうか。

……泣いてなきや、いいんだけど。

「告白されてさ」

……それは。

あつたかくて、楽しくなる、と僕が信じているもの。

「わあ!!!」

大きな声が弾ける。首を曲げると、そこには興奮してキラキラした目の伊呂波がいた。

「わあお!!!」

僕は笑った。無理やり笑った。

十七歳なのだ。信じてもいいと思うのだ。

僕はまだ信じている。

シンビテキなもの 3

そもそもその女の子になぜ告白されたのか、僕にはそれが分からないままでした。

コンビ二へ寄ろうとする道、伊呂波の喜ぶ顔を思い浮かべながらも歩いていたところ同じクラスの女の子に声をかけられた。別に嫌悪感する相手ではなかったので、道中一緒のところまで何となく話すこととなる。顔だってそんな悪くない、女の子らしい女の子だ。ギャルツ気もない、素朴によく笑う女の子だった。彼氏が一人二人いたという過去を晒されたって、別に驚きやしない。きつとこれまでだって青春を謳歌してきて、これからだって出来るに違いない女の子。

「あんま話したことないよね、私ら」

そう言って笑っていたが、今思えばそうやって笑っていたのは僕と並んで話せて嬉しかったからなのかもしれない。

確かに、あまり親しく話したことなどなかった。話したと言っても、おそらく二言三言程度のものだろう。あまり覚えてはいないが、しかし同じクラスで一度も言葉を交わしていないということはなかったはずだ。

それ故の、疑問。

この子はどうして僕を好きになった・・・？

女の子はコンビ二まで一緒に来た。自分にも買いたいものがあるとか言っていたが、それも果たして口実なのか本当なのか今となっては分からない。とりあえずそのときの僕は、その子の言っていたことをそのまま言葉どなりに受け取って、買い物その子と共に済ませた。

僕に記憶力に寄れば、ほんのそれだけのこと。

それだけのことしか、していない。

それはほんの10分か20分程度のことだった。

それなのに、女の子は僕に言った。

僕のが好きなのだ、そして付き合いたいとも、……ずっと前から想いを寄せていたとも。

一生懸命その子は色々なことを喋っていたが、もうほとんど覚えていない。僕は僕で事態を飲み込むことに一生懸命だった。頭は真っ白で、何も気の利いたことが言えなくて、とりあえずこの子が僕のことを好いてくれているという点において認識しようと必死になっていた。

コンビニを出てすぐの駐車場の傍には幸い人はおらず、僕とその子は二人で淡い青春ごっこみたいなものを繰り広げていた。

「ああ……」

その子が真摯な目をして僕の返事を待ち受けていて、それに僕は今すぐ答えなければいけないような気がした。返事を待たせることは、無駄に期待を持たせるような気がしてならなかった。僕の答えははつきりと一つしかなくて、悩む必要などなかったのに言い様がどうにも見つからなくて悩んでいた。

「……ごめん」

結局それだけしか言えなかった。

女の子は目をそらして、「分かった」と言った。女の子もそれだけしか言わなかった。

「じゃあ、バイバイ」

僕の顔など、もう見なかった。何となくだけど、いっぱいいっぱいなんだと思った。そうして去ってしまった女の子が、僕には好ましかった。あの子はたぶん、笑いたいときにしか笑えない子なのだ。僕には分からなかった。分かるうとする余裕もなくて、彼女が一生懸命僕のことをどれだけ好きなのか語っていることのほとんどを聞き流してしまったことを申し訳なく思った。

「……」

立ち尽くして一人になった僕は、伊呂波のことを唐突に思い出した。

ヤキトリの存在を感じた。

「・・・しょうがないよなあ」

だから言い訳みたいに、つぶやいてしまった。

「僕にだって、好きな人はいる」

もちろん僕がそうつぶやいたことは、伊呂波には内緒だった。伊呂波はただ僕の話をつんつんと興味津々な風に注意深く聞いて、満足げにこう言う。

「君は案外、モテるんだよ。君が知らないだけでね」

妙に自信タップリだった。

そうか？と僕が言つと、「ああ！？何だこのモテ男くんがぁ！？調子乗るなよなあ！！」と妙なやつあたりをされた。ふぎやあ、と伊呂波が僕のおにぎりをついでとばかりに取るうと襲い掛かってきたので、僕は伊呂波の頭をおにぎりを持っていない方の片手で抑えて応戦する。「うわぁん、くれよこのやるお」と伊呂波が僕の視界の中で暴れる。まあ、暴れると言っても形だけだ。伊呂波はこういうじゃれあいを好む。重々承知していたことだった。

「君はカツコイイんだよ。癩しかだけどね」

ヤキトリをいつの間にか食べ終えたらしい伊呂波は、ヤキトリの串と袋をゴミ箱に捨てようと僕から離れて僕の顔を見ないままそう言った。

伊呂波にカツコイイと言われて、僕は嬉しくなる。

シンピレキなもの 3 (後書き)

・・・まあこれも、私の妄想ですよ。

あははー

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0584y/>

シテキなもの

2012年1月15日02時45分発行